

Ⅲ その他の餌料生物

今回ワムシ以降のエサとしては少量であるが、チグリオパス、数種のコペポーター等を用いた。チグリオパスはその目的での生産は行わなかったが、ワムシとほぼ同様な手法で大量培養を行なうことが可能であり今後生産を試みる必要がある。その他のコペポーターは自然に発生したが、かなりの量が採取され、特に止水的状況で発生している事などから、今後攪拌の困難な大規模な増殖での対象となる可能性があり、計画的な採取を試みる必要がある。

他にタマジシンの継続培養を行なっているが今回はそれを用いなかった。淡水種で海水中ではまもなく斃死する難点もあるが、培養が容易であり、栄養的な欠陥も強化剤との併用で補われる事が予想され、今後有効利用を計る必要がある。当支場で扱う魚種はふ化仔魚の小型種が多く、それらにはカキ幼生を使用している。しかし当地でカキ幼生を安定的に大量に入手するのは困難であり、種苗生産上のネックとなっている。カキ幼生に代わる小型の餌料生物の開発が必要とされるが、ワムシ培養中に原生動物のキリアータ、及び種は不明であるが底性の小型のワムシが発生し、共に $80\mu\sim 100\mu$ サイズである。

試験的な投餌ではこれらはよく捕食されるが、小型なため培養水中の残渣と分離するのが困難で安定的な高密度培養にはいたっていない。これらを餌料として用いる際にはその大量培養技術もさることながら、採取、投餌方法等を含めた検討が必要である。

Ⅳ 今後の課題

- ・クロレラのより高密度、安定培養、特に夏季における安定培養。
- ・ワムシより小型の餌料生物の開発とその利用方法の検討。
- ・ミジンコ、アルテミア、その他のコペポーター類等、未利用餌料生物の利用。
- ・チグリオパスの大量培養及びその他のコペポーター類の開発。
- ・餌料生物の保存技術の検討。